

# 「ロイヤル」や「国際」が付く ホテル名の日欧比較

—— 1960～70年代日本のホテル屋号（1） ——

Comparison of Japanese and European Cases for Hotel Names included “Royal”  
or “International”. *Japanese Hotel Names in the 60s and 70s: Part 1*

河 村 英 和  
Ewa KAWAMURA

## 要 旨

高度経済成長期の1960～70年代は、ホテル建設ラッシュで数々のホテルが日本各地で誕生したが、その屋号の命名には、ある種の傾向や規則性があり、ホテルの所在地の町名に「観光」「グランド」「ニュー」などの特定の単語を組み合わせることが多かった。町名や国名をホテル名に含める場合、それに相応するホテルの格式も命名の動機も、ヨーロッパのホテルと日本のホテルでは全く異なっている。そもそもヨーロッパの典型的なホテル屋号の派生期から、日本では一世紀近く遅れて同名の屋号が普及したので、同タイプの命名法のホテルでも、建設時のコンセプトやデザインにも日欧で大きな違いがある。本稿（パート1）では、18～19世紀ヨーロッパのホテルの屋号の命名法の歴史を踏まえ、国名の入った屋号や、「ロイヤル」と「国際」を含む屋号の傾向と派生期を日欧で比較する。なお、「ニュー」「グランド」「観光」「ビュー」「パーク」「プラザ」「パレス」等を含むホテルの名については次稿（パート2）以降で扱う。

キーワード：ホテル、屋号、ロイヤル、国際、建築

## 1. はじめに

高度経済成長期の1960～70年代、二つの国家イベントー1964年の東京オリンピックと1970年

の大阪万博一開催に向け、日本各地でホテル建設ラッシュ・開業ブームが起こった。その当時、よく好まれていた屋号（名前）に、ホテルの所在地の地名と「観光」「グランド」「ニュー」等を組み合わせたものがある。とはいえ戦前からこのような命名は珍しくなく、とくに「地名+観光ホテル」という屋号の流布は、1930年代の国策による外国人向けの高級ホテルの建設と関係があった<sup>1</sup>。しかしこのような名前が付いたホテルが急増するのは昭和30年代以降だ。1960～70年代にできた「地名+観光」や「地名+グランド」と命名されるホテルの場合、必ずしも高級志向に限ったものではなく、大衆向けホテルの場合も少なくないが、いずれにしてもその町を代表するホテルの一つとなった。

とはいえ通常、町を代表するホテルは、その町で最も高級なホテルである。明治時代にできた最初期の高級ホテルは外国人客向けで、外国人が自由に往来できる居留地内に建った。たとえば横浜の「横浜ホテル」（1860年<sup>2</sup>）や、東京築地の「江戸ホテル」（1869年）であり、どちらも所在地の地名を冠しただけのシンプルな名前である。江戸ホテルは、やがて「築地ホテル館」と呼ばれるようになり<sup>3</sup>、「江戸」から「築地」へと、所在地の地名がより明確になった。建築家の大熊喜邦（1877-1952）によれば、築地ホテル館は「洋風建築として著明なり。（中略）明治時代に於ける本邦の洋風建築史の第一頁に収めらる可きものなり」という<sup>4</sup>。洋風建築といっても、日本建築のなまこ壁が付いた擬洋風建築であったが、建物中心に塔屋が頂かれた、当時の日本としては最先端の近代建築・高層建築であり、当然ながら高級ホテルとして十分に相応しい造りだった。

日本のホテルの屋号の名は当初から、ホテルの所在地の「地名が付いた」命名が一般的だったが、ヨーロッパでは、「地名」を冠するホテル名が登場する以前に、宿屋の屋号を継承したタイプの命名法の前史がある。また、19～20世紀初頭のヨーロッパの場合、ホテルが立地する町とあえて異なる町の地名をホテル名に付けることも広く行われていた点は、日本のホテルの命名の傾向と大きく異なっている。

そこで本稿では、まずヨーロッパと日本のホテル屋号の命名法の違いを理解するために、ヨーロッパのホテルの屋号の命名史とそれに伴うホテル建築の類型の変遷を辿り、1960～70年代の日本のホテル建設・開業ラッシュ期に普及した同屋号の派生と違いを明確にしてゆきたい。

- 
- 1 砂本文彦『近代日本の国際リゾート：一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社、2008年
  - 2 澤護『横浜外国人居留地ホテル史（敬愛大学学術叢書3）』白桃書房、2001年、pp. 3-7.
  - 3 公文書では「外国人旅館」、英字新聞では「Yedo Hotel」、錦絵には「東京築地開港異人館」や「築地ホテル館」など様々名称で当初は書かれていた。初田亨「外国人旅館（築地ホテル館）の建築について」『日本建築学会論文報告集（通号331）』1983年9月、p. 130.
  - 4 大熊喜邦「築地ホテル館考」『建築二十講』鈴木書店、1923年、p. 306.

## 2. ホテル屋号の命名法の変遷史：地名付きホテル名の日欧比較

### 2-1. 具象名で命名された宿屋

「所在地の町の名・地名+ホテル」という屋号は、日本のホテル名称で最初に広く普及した命名法である。その一方、明治維新後からホテルの歴史が始まる日本とは事情が全く異なるヨーロッパでは、ホテル名—ホテル名といっても、当初は宿屋の屋号の命名法を継承したものである—のために最初に流布した命名パターンでは地名は使われず、まずは具象名によるものだった。ホテルの屋号の命名パターンの変遷は、その建物の形状とも深く関わっており、そもそも「ホテル建築」という建築類型が整っていない時代、まだ「ホテル」と呼ばれるよりも「宿屋（英 inn、独 Gasthaus, Gasthof, 仏 auberge、伊 locanda）」が主流であった18世紀までは、一般家屋とさして変わらぬ建物であったため、外観からホテル（宿屋）であることを識別しやすく差別化するために、外壁から突出する鋳物や木彫の看板や板絵を取り付けていた<sup>5</sup>。そのため、看板を飾るのに効果的な絵画・彫刻表現に適した「具象物」が、屋号の命名に影響した。具体的には、動物（ライオン<sup>6</sup>、馬、鷹、牛、象<sup>7</sup>、鶏、鳩、白鳥、孔雀、鹿、熊、猫、ヤマネコ、ペリカン、魚、イルカ）、自然・植物（泉、オークの木、薔薇、百合、マーガレット、花）、天体（太陽<sup>8</sup>、月、星<sup>9</sup>、地球）、人間（王、ムーア人、大使、女王、聖人、巡礼者、天使<sup>10</sup>、野人、巨人<sup>11</sup>、人魚）、モノ

---

5 河村英和「19世紀から20世紀初頭におけるヴェネツィアのホテル建築の変遷について—ヴェネト・ビザンチン様式の歴史的パラッツォ転用からグランドホテル様式建設まで」『日本建築学会計画系論文集 73 (629)』、2008年、p. 1637。

6 たとえば、16世紀に創業した英シュルーズバリー Shrewsbury のホテル「ライオン The Lion」は、1853年に文豪チャールズ・ディケンズが泊まった宿として知られており、内外装は18世紀末のジョージアンスタイルで、外壁の玄関上部にはライオンの彫刻が飾られている。Pevsner, Nikolaus, *A History of Building Types*, Princeton University Press, Princeton, 1976, p. 170. <https://www.thelionhotelshrewsbury.com/>（2022年4月5日閲覧）

7 たとえば、トーマス・マンの小説『ヴァイマルのロッテ Lotte in Weimar』（1939年）の舞台でも知られる、今も営業が続く独ヴァイマル Weimar を代表するホテル「エレファント Elephant」の創業は1696年である。<https://www.hotelelephantweimar.de/>（2022年4月5日閲覧）

8 たとえば、現在、伊ローマ Roma のパンテオン付近にあるホテル「太陽 Sole」の創業は、1467年に遡る。<https://www.hotelsolealpantheon.com/>（2022年4月5日閲覧）

9 イエスの生誕に因む、キリスト教的な意味合いをもつ「星」に由来している。

10 現在も営業が続く英グラントサム Grantham のホテル「Angel and Royal」は、1203年の創業時は「天使 The Angel」という屋号で、玄関の扉の上には天使の彫刻が飾られている。Pevsner, *op. cit.*, p. 169. <https://www.angelandroyal.co.uk/>（2022年4月5日閲覧）

11 今も営業が続くのに、独バイエルン州ミルテンベルク Miltenberg の宿屋「巨人亭 Zum Riesen」（1411年）があり、巨人の姿を描いた鋳物レリーフの看板を出している。Pevsner, *op. cit.*, pp. 170-171. <https://riesen-miltenberg.de/geschichtedesriesen/>（2022年4月5日閲覧）

(帽子<sup>12</sup>、王冠、十字、剣、盾、錨)、建物(塔、梯子)、概念(幸福、運命)などで、さらにこれらの具象物を目立ちやすい「色(金、黒、白、赤、青、緑など)」で形容した名前にすれば、板絵や彫刻レリーフ・鋳物看板を彩色するさいの目安にもなって、道路から宿屋がよく目視できる。たとえば、「赤い熊<sup>13</sup>」や「白い鹿<sup>14</sup>」、「黄金の鹿<sup>15</sup>」といった具合だ。また、色ではなく数字を組み合わせることもある。たとえば「2つの塔<sup>16</sup>」や、「3人のムーア人<sup>17</sup>」、「3人の王<sup>18</sup>」や「3つの王冠」などといった屋号で、これらの場合の「3」とは、イエス・キリストの生誕を祝福しにベツレヘムにやってきた「東方の三博士」を意味している(図1)。かつて宿屋の需要は巡礼者たちの存在が寄与したため、中世から18世紀以前に開業した宿屋の屋号には、宗教的な含意があるものが少なくない。ベツレヘムの星を指す「星」、「百合」は聖母の暗喩、「聖ゲオルギウス」などの聖人名、単に「巡礼者」などという名前があることからうかがえるように、これらの宿の立地も巡礼地へ続く街道沿いにあることが多い。

## 2-2. ホテル建築の概念の誕生と「王室(ロイヤル)」という屋号

ホテルらしさを建築で表現する時代になると、屋号が具象名である必要がなくなってくる。それは18世紀半ば以降で、英国貴族の間で定着した、教養を身につけるために長期の大陸旅行「グランド・ツアー」が最も興隆した時期と重なっている。彼らの最重要目的地は、古代・ルネサンス美術の宝庫であるイタリアであったため<sup>19</sup>、グランド・ツアー中の賓客を迎えるのに相応しい

12 「帽子 capello」はイタリアでよくあった宿屋の屋号で、ローマ教皇(白い帽子)や枢機卿(赤い帽子)といったカトリックの高位聖職者が被っている帽子を暗喩している。

13 独フライブルク Freiburg にある、現在も営業が続くヨーロッパ最古のホテル名は「赤い熊亭 Zum roten Bären」(1120年)。<https://roter-baeren.de/> (2022年4月5日閲覧)

14 宿屋としての営業は終えているが、建物が現存する英ノーフォーク州スコール Scole の宿屋「白鹿 White Hart」(1655年)では、かつては木彫で複数の鹿や狩の女神ディアナ(アルテミス)の姿があらわれた巨大な看板が、宿の外壁から反対側の道路の脇まで飛び出す配置で、門状に取り付けられていた。Denby, Elaine, *Grand Hotels*, Reaktion Books, London, 1998, p. 19.

15 たとえば、現在も営業が続くものに、墺ザルツブルクを代表する老舗ホテル「黄金の鹿 Goldener Hirsch」(1671年)がある。<https://www.marriott.it/hotels/travel/szgle-hotel-goldener-hirsch-a-luxury-collection-hotel-salzburg/> (2022年4月6日閲覧)

16 今も伊ヴェローナ Verona では、町を代表する高級ホテルは「ドゥエ・トッリ(二つの塔) Due Torri」(1674年創業)である。<https://hotelduetorri.duetorrihotels.com> (2022年4月5日閲覧)

17 独アウグスブルク Augsburg の高級ホテル「3人のムーア人 Drei Mohren」(1344年以前)は、かつてはバロック様式の壮麗なファサード(ただし、現建物は1950年代に再建されたもの)を誇っていたが、近年屋号が「Hotel Maximilian's」と変名された。Pevsner, *op. cit.*, pp. 170-171. <https://www.hotelmaximilians.com/> (2022年4月5日閲覧)

18 スイス・バーゼル Basel の最高級ホテルの屋号は「3人の王 Les Trois Rois」(1681年、現建物は19世紀に再建されたもの)である。<https://www.lestroisrois.com/de/hotel> (2022年4月5日閲覧)

19 河村英和『イタリア旅行―「美しい国」の旅人たち』中央公論新社(中公新書)、2011年、pp. 4-5.



図1 現在もバーゼルの町を代表する高級ホテル「レ・トロワ・ロワ（3人の王）」のファサードには東方の三博士の像が飾られている（2005年1月、筆者撮影）

屋号のネーミングへと変遷する過程は、他のヨーロッパ諸国よりイタリアがとくに早かった。つまり、メインの顧客層である英国貴族に迎合した、英国に因んだ名前の屋号の数々の誕生と普及は、イタリアが最も進んでいたのである。しかしホテル建築については、イタリアには貴族の屋敷や修道院といった豪華な既存の建造物が数多く、自ずとそれらをホテルに転用することが慣例となったため、いわゆるグランドホテル様式やパレス式ホテルとよばれる<sup>20</sup>、「新築で」豪華に造られるホテル建築では、イタリアは他のヨーロッパ諸国より半世紀近く遅れをとった<sup>21</sup>。このようなホテルらしさを追求する建築類型の派生に先駆けていたのは、19世紀初頭よりとりわけ英国人に人気が出てきた旅先のスイスであった<sup>22</sup>。なお、外交術や洗練されたファッション・マナーを身につける目的で、フランスはイタリアに並ぶグランド・ツアーの必須訪問国で、18世紀後半のフランス人建築家たちは、ディドロとダランベールによる『百科全書』の影響もあり、理論的にホテル建築を確立しようと試みた。

当時のフランス語で、旅行者が泊まるホテルに相当する単語はじつは *hôtel* ではなく、*hôtellerie* であった。『百科全書 *L'Encyclopédie*』（第8巻、1765年）での「HOTEL」の項目は、「屋敷・邸

20 Pevsner, *op. cit.*, pp. 169-192; Schmidt, Michael, *Palast-Hotels. Architektur und Ausdruck eines Bautyps 1870-1920*, Gebr. Mann Verlag, Berlin, 1982; Watkin, David, *The grand hotel style, in Grand Hotel*, London-Melborne, 1984, pp. 13-25.

21 Kawamura, Ewa, *Architettura alberghiera in Italia: dalla trasformazione degli edifici storici alla costruzione dei grand hotel*, Architettura per l'ospitalità in Italia tra Ottocento e Novecento, Gangemi Editore, Roma, 2020, pp. 17-30

22 河村英和『観光大国スイスの誕生—「辺境」から「崇高なる美の国」へ』平凡社（平凡社新書）、2013年、pp. 81-104.



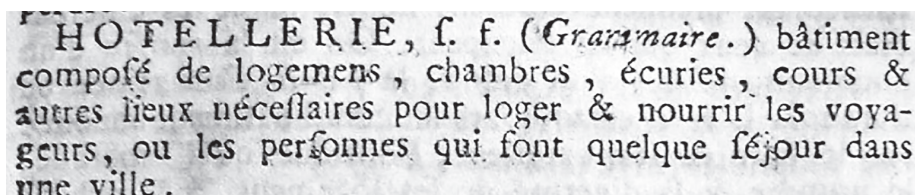


図2 『百科全書』（第8巻、1766年版）のホテル「HOTELLERIE」の項目

宅」を意味する内容しか書かれておらず<sup>23</sup>、宿泊施設のホテルは「HOTELLERIE」という項目のほうで、「住居、部屋、馬小屋、中庭、ならびにその他、町で数日滞在する者や旅行者らを泊めて食事を提供できる場所で構成されている建物」と、定義された（図2）<sup>24</sup>。ここには外観デザインについて特段の説明はない。フランス革命期に活躍した建築家ルドゥー Claude Nicolas Ledoux（1736-1806）の建築書のなかに登場する「小さなホテル PETITE HOTELLERIE」の図面はこの『百科全書』の定義を体現している平面計画であるが、立面図で見る限り、その外観はシンメトリで公共建築であることを思わせる程度である<sup>25</sup>。まだホテル建築独自の類型プランは確立されておらず、19世紀はじめも一般住宅と大差なかったようで、建築理論家デュラン Jean-Nicolas-Louis Durand（1760-1834）は、建築教本『緻密な建築講義 *Précis des leçons d'architecture*』（1805年）のなかで、ホテルの建物について、次のように批判している。「ヨーロッパのほとんどのところではそれは単なる個人住宅にすぎず、整頓、快適性、清潔度となると、おおかた農家住宅のような劣悪なもの」と述べ<sup>26</sup>、デュランは同書のなかで、「ホテルとポスト HOTELLERIE ET POSTE」と題した図面を収録し、『百科全書』にある HOTELLERIE の定義通り、中庭と厩舎のスペースを広く確保していることを示しているが、そのデザインは、町中のホテルというよ

23 *L'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres*, Tome huitieme (H=IT), Samuel Faulche, Neufchastel, 1765, p. 319.

24 Idem, p. 320. その原文は：«bâtiment composé de logemens, chambres, écuries, cours & autres lieux nécessaires pour pour loger & nourrir les voyageurs, ou les personnes qui sont quelque séjour dans une ville»である。

25 Ledoux, Claude-Nicolas, *L'Architecture considérée sous le rapport de l'art, des moeurs et de la législation*, chez l'Auteur, Paris, 1804, pp. 58-59.

26 Durand, Jean-Nicolas-Louis, *Précis des leçons d'architecture*, vol. 2, Chez l'Auteur et Bernard, Paris, 1823, p. 96. その原文は：«Des Hôtelleries. / Ces lieux, destinés à recevoir les voyageurs, ne sont, dans la plus grande partie de l'Europe, que des édifices particulier qui n'offrent pas, pour la plupart, plus d'ordre, de commodité, de propreté que la majeure partie de nos fermes En Orient, au contraire, ce même, lieux, nommes caravaserail, sont des édifices publiques bâtis et entretenus avec le plus grand soin par le gouvernement. Ces édifices, disposés de la manière la plus simple, comme on peut le voir planche 30 du Parallèle, offrent, au rapport de tous les voyageurs, le plus bel aspect. On sait combien celui de nos hôtelleries en général est ignoble et repoussant. Rien ne serait cependant si facile que de le rendre agréable. Il ne faudrait pour cela que donner à leur disposition la convenance et la simplicité qu'elles exigent»である。

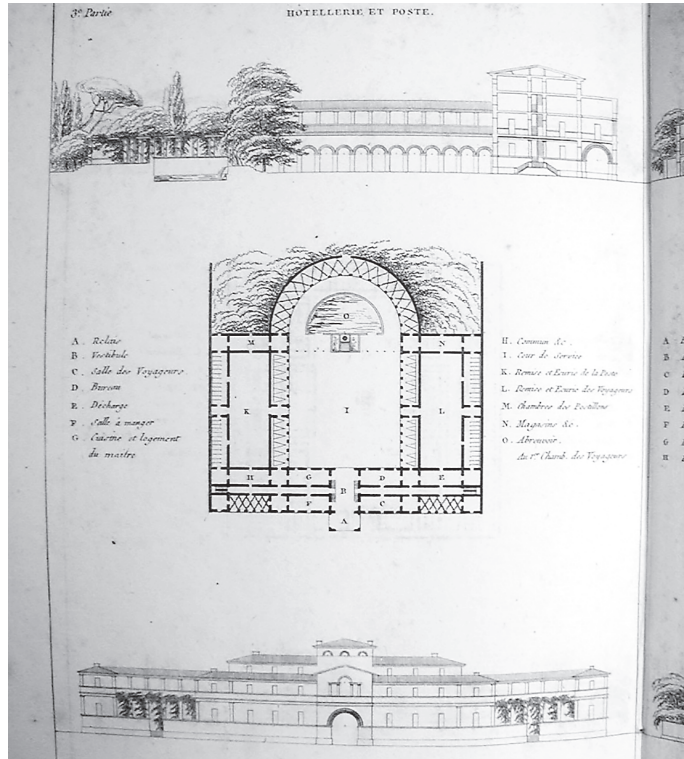


図3 建築理論家デュランによる建築教本『緻密な建築講義 *Précis des leçons d'architecture*』(1805年)に掲載された宿泊施設(ホテルとポスト HOTELLERIE ET POSTE)の雛形図面のなかで提示した「ホテルとポスト HOTELLERIE ET POSTE」の図面

りも大都市間の途中にありそうな土地が広く空いている、どこかの田舎の街道沿いのポスト(郵便馬車の宿駅)の場合を想定したようだ(図3)<sup>27</sup>。

1802年にイタリア旅行をした英国人ジョン・チェトワード・ユースタス John Chetwode Eustace (1762-1815) が、自身の旅行記の巻末にイタリアにある主要なホテル・宿屋を94件リストアップしているが、その名称のほとんどが具象名を使った旧来の屋号で、ときに宿の主人の名前を屋号にしたものや、または単に「ポスト(郵便馬車の宿駅)」というものもある<sup>28</sup>。そのなかに新しいタイプの屋号として、ミラノ、ボローニャ、マントヴァ、ノーヴィの「Albergo Reale(ホテル・ロイヤル)」や、モデナの「Il grande Albergo」も記載されている。ただこのモデナのホテル「Il grande Albergo」は、冠詞付きで形容詞「grande 大きい」が小文字で始まり、名詞「ホテル

27 また、デュランが前著『あらゆる種類の建物の収集と比較 *Recueil et parallèle des édifices de tout genre*』(1800年)で述べたオリエント・シルクロード沿いの隊商宿「キャラバンサライ *caravanseraï*」を見習うべきとの見解もこの図面に反映されている。

28 Eustace, John Chetwode, *A Classical Tour through Italy*, An. MDCCCII, vol. IV, 1818, Leghorn, pp. 507-509.

Albergo」が大文字で始まっているので、19世紀に広く普及する典型的なホテル屋号の「グランド・ホテル」に相当する伊語「グランデ・アルベルゴ Grande Albergo」とはニュアンスが異なり、「あの大きな“ホテル”」と文字通りに捉えられていたようだ。というのも、モデナの町にも、さきに列挙した北イタリアの主要都市にできた「ホテル・ロイヤル」に近い伊語「アルベルゴ・レアーレ」と命名された宿泊施設があり、この建物に接頭語として「グランデ」が付されることもあったので、ユースタスが記録しているモデナの「Il grande Albergo」とは「Albergo Reale」のことであろう。モデナの「アルベルゴ・レアーレ」は、馬車旅行時代の幹線道路であるエミリア街道沿いに、1765年に地元の建築家テルマニーニ Pietro Termanini (1709-1796) の設計で建設され、後年 Albergo に相当する仏語で単に「オベルジュ Auberge」または「外国人のためのオベルジュ Auberge per forestieri」と呼ばれた<sup>29</sup>。このホテルの仏語名オベルジュは、閉業後も「通りの名」となっており、このホテルのあった通りは、19世紀のあいだ「オベルジュ小路 vicolo Auberge」と呼ばれていた<sup>30</sup>。

1802年にユースタスが列挙したイタリアのホテル名は伊語表記であるものの、19世紀初頭には、イタリアに限らずヨーロッパ各国の高級ホテルは、「仏語名とする」ことが浸透してきていた。それは当時の教養人の国際語が、英語ではなくフランス語であったからである。つまり高級ホテルであればあるほど、屋号が仏語名であることは必須となり、ホテル名が当事国の国語表記であれば商人宿か庶民的な宿と推測できた。ユースタスの記述はまだホテル屋号の仏語表記の主流化に追い付いていないが、イタリアでは屋号「ホテル・ロイヤル」にかぎっては、他の屋号と比較すると当面のあいだは伊語名で「アルベルゴ・レアーレ」のまま呼び、仏語で呼ばない傾向にあったようだ。ともかく「王室（英：ロイヤル Royal、仏：ロワイヤル Royal (e)、伊：レアーレ Reale)」と銘打つ屋号は、グランド・ツアー全盛期に誕生し、その客層が王侯貴族かそれに匹敵する富裕層が想定され、このような屋号が誕生したわけであるが<sup>31</sup>、特筆すべきは、当初からホテルの用途で「新築」されているということである。建物も客層に相応しく立派で壮麗であることが要求され、先に挙げたモデナの「アルベルゴ・レアーレ Reale」もホテルとして生を受け、マントヴァの「アルベルゴ・レアーレ」も、1784年のヴェローナの建築家マルコーニ Giovanni

29 Simoncini (a cura di), Giorgio, *L'edilizia pubblica nell'età dell'Illuminismo*, vol. 2, Olschki, Firenze, 2000, p. 503.

30 Valdrighi, Luigi Francesco, *Dizionario storico-etimologico delle contrade e spazi pubblici de Modena*, seconda edizione, Tipi di Andrea Rossi, Modena, 1880, p. 17. 現在この通りは、仏語 Auberge ではなく伊語で「vicolo dell'Albergo」と呼ばれている。

31 18世紀イタリアでは、貧しい人のための宿泊施設である「アルベルゴ・デイ・ポーヴェリ（救貧院）Albergo dei poveri」が、ジェノヴァ、パレルモ、ナポリで建設されていたので、それと区別するために付けた命名という説もある。Valdrighi, Luigi Francesco, *Appendici e note alla 2. edizione del dizionario storico - etimologico delle contrade e spazi pubblici di Modena*, Società tipografica, Modena, 1883, p. 11.



Battista Marconi (1755-1825) の設計によってホテルとして新築された<sup>32</sup>。とはいえ、まだ一般住宅や貴族の館と大差ない意匠の建物だった。

ヨーロッパで「ロイヤル」と屋号が付くホテルが「新築」されて、グランドホテル様式やパレス式ホテルとよばれる類型に属するレベルになるのは19世紀後半以降、とくにベルエポック期である。屋号に「ロイヤル」と付けばその町を代表する高級ホテルとなるが、単に「ロイヤル」と称されるだけではなく、「グランド・ホテル・ロイヤル」や「ロイヤル・マジェスティック」など、ネオ・ルネサンス様式の壮麗な建築様式に相応しく見合うようにしたかのような、仰々しい「複合名の」屋号も少なくない。

その一方、日本のホテルの屋号に「ロイヤル」が付いたものが増えるのは、戦後の高度経済成長期の1960-70年代である。もちろん日本に王室はなく、顧客層も階級社会的に限定しようとするわけでもないが、日本のホテル名に含まれる「ロイヤル」は高級ホテル路線への意思表示であるのは、ベルエポック期のヨーロッパと同じで、建物を新築した点も同じである。しかし日本では、「ロイヤル」を含むこの屋号名がヨーロッパで流行してから、一世紀近く遅れてから流行しているの、当然ながらその建築様式は全く異なる。例外的にヨーロッパと同じ意図と建築様式の事例は、英国人ジョサイア・コンドル Josiah Conder (1852-1920) 設計のヴィクトリア様式建築の横浜のロイヤルホテル (1898 年) があるが (図4)、ヨーロッパの「ロイヤル」と付くホテルの多くは、戦前の歴史主義建築・折衷主義建築で、日本の場合のほとんどの事例は戦後のモダニズム建築からはじまっている。

命名のパターンは「所在地の町名+ロイヤル (ローヤル) ホテル」が圧倒的に多く、時系列順に主なものを列挙すると、宇都宮ロイヤルホテル (1950 年<sup>33</sup>)、福山ロイヤルホテル (1960 年<sup>34</sup>)、札幌ローヤルホテル (1964 年<sup>35</sup>)、大阪ロイヤルホテル (1965 年<sup>36</sup>)、那須ロイヤルホテル (1968 年<sup>37</sup>)、八丈島のホテルローヤル (1968 年<sup>38</sup>)、仙台ロイヤルホテル (1970 年<sup>39</sup>)、京都ロイヤルホ

32 1821年にホテルは閉業し、その後「バルベッタ館 Palazzo Barbetta」と呼ばれ、建物は現存している。Forni, Maria Enrica Marica, *L'Albergo Reale di Mantova*, in *Accademia Nazionale Virgiliana di scienze lettere e arti, Atti e memorie, Nuova serie*, vol. LXXI, Accademia nazionale virgiliana, Mantova, 2003, p. 199.

33 1920年代に開業した「栃木荘」に遡るが、1950年に「宇都宮ロイヤルホテル」と改称した。朝日新聞社編『日本の宿—Where to lay your head in Japan』朝日新聞社、p. 149.

34 ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑1973年版』オータパブリケーションズ、1972年、p. 386.

35 1964年の東京オリンピックの開催に合わせて、国際観光ホテル整備法に基づき建設された。朝日新聞社編、前掲書、p. 131. 同社は、同じく札幌に1973年に回転レストランを備えた「センチュリーローヤル」を開業させた。ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑1973年版』オータパブリケーションズ、1972年、p. 88.

36 ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑1973年版』オータパブリケーションズ、1972年、p. 343.

37 ホテルレストラン誌編、前掲書、1972年、p. 137.

38 ホテルローヤル〈八丈島〉『月刊ホテル旅館』1971年7月号、pp. 38-39.

39 ホテルレストラン誌編、前掲書、1972年、p. 128.



図4 屋号に「ロイヤル」を含む日本のホテルの絵葉書・パンフレット・荷札のロゴ部分のコラージュ（右上の画像は、20世紀初頭の横浜のロイヤルホテルの絵葉書より）

テル（1971年<sup>40）</sup>、ホテル函館ロイヤル（1971年<sup>41）</sup>、館山寺ロイヤルホテル（1971年<sup>42）</sup>、鬼怒川ロイヤルホテル（1972年<sup>43）</sup>、信州ロイヤルホテル（1972年<sup>44）</sup>、諏訪湖ロイヤルホテル（1973年<sup>45）</sup>、指宿ロイヤルホテル（1973年<sup>46）</sup>、岡山ロイヤルホテル（1973年<sup>47）</sup>、鹿児島サンロイヤルホテル（1973年<sup>48）</sup>、三朝ロイヤルホテル（1973年<sup>49）</sup>、相模湖ローヤルホテル（1973年<sup>50）</sup>、鳥羽ロイヤルホテル（1974年<sup>51）</sup>、金沢ロイヤルホテル（1974年<sup>52）</sup>、群馬ロイヤルホテル（1975年<sup>53）</sup>、ホテルロイヤル盛岡（1976年<sup>54）</sup>、能登ロイヤルホテル（1978年<sup>55）</sup>、湯沢ロイヤルホテル

40 ホテルレストラン誌編、前掲書、1972年、p. 332.

41 ホテルレストラン誌編、前掲書、1972年、p. 108.

42 「館山寺ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1971年2月号、pp. 11-15.

43 斎藤武「鬼怒川ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1972年4月号、pp. 38-40.

44 「信州ロイヤルホテル〈上山田〉」『月刊ホテル旅館』1972年10月号、pp. 20-23.

45 朝日新聞社編、前掲書、p. 175.

46 朝日新聞社編、前掲書、p. 263.

47 早川哲「岡山ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1973年12月号、pp. 37-40.

48 ホテルレストラン誌編、前掲書、1972年、p. 460.

49 関建築設計事務所「三朝ロイヤルホテル」『近代建築』1973年7月号、pp. 106-108.

50 森一級建築設計事務所「相模湖ローヤルホテル」『近代建築』1973年2月号、pp. 102-105.

51 (株)極東設計事務所「鳥羽ロイヤルホテル」『近代建築』1974年5月号、pp. 114-117.

52 「金沢ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1974年6月号、pp. 35-37.

53 斎藤武「群馬ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1975年11月号、pp. 33-37：坂倉建築研究所東京事務所「群馬ロイヤルホテル」『新建築』1976年4月号、pp. 179-192.

54 「ホテルロイヤル盛岡」『月刊ホテル旅館』1976年12月号、pp. 15-19.

55 福永文雄「随筆 能登ロイヤルホテル」『温泉』1978年11月号、p. 6.

(1979年<sup>56</sup>)、八代ロイヤルホテル(1981年<sup>57</sup>)、霧島ロイヤルホテル(1985年<sup>58</sup>)、長野ロイヤルホテル(1985年<sup>59</sup>)、奈良ロイヤルホテル(1985年<sup>60</sup>)、鹿部ロイヤルホテル(1986年<sup>61</sup>)などがあった(図4)。このように日本では、1970年代が「ロイヤル」付きの屋号が流行した全盛期で、当時の日本のホテル建築の内装では、シャンデリアが多用され、きらびやかで豪華な照明器具、螺旋階段、ルイ15世様式「風」の猫足の家具、乙女チックでキッチンでロマンチックな疑似的ロココ趣味が流行していたこととも、「ロイヤル」という命名の急速な普及と関係があったのであろう<sup>62</sup>。

### 2-3. 国名・町名の付いたホテル屋号

前節で触れた、ユースタスが1802年に作成したイタリアのホテルリストの中には、国名や町の名を使用した屋号も少なくない。シエナに「英国 Inglese」、ナポリに「グレート・ブリテン La Gran Brettagna」、ヴェネツィアに「イギリスの女王 Regina d'Inghilterra」、トリノに「イギリス Inghilterra」と「フランス Francia」、ヴェネツィアとヴィチエンツァに「フランスの盾 Scudo di Francia」といった国名を含む屋号のホテルがあり、フィレンツェとジェノヴァに「四ヶ国 Le Quattro Nazioni」<sup>63</sup>、トレントには「ヨーロッパ Europa」と命名されたホテルがあった。いずれも高級ホテルで、20世紀になっても仏語で「ドゥ・ルロップ de l'Europe」や「グランド・ブルターニュ Grande Bretagne」と名が付くホテルは、たいていの場合一流ホテルであり、これらの

---

56 湯沢ロイヤルホテル「会社情報・沿革」<https://yuzawa-royal.co.jp/company/> (2022年4月8日閲覧)

57 『ホテルレビュー』1982年5月号、p. 17.

58 「霧島ロイヤルホテルがオープン」『財界九州』1985年4月号、pp. 130-131

59 高島不二男「長野ロイヤルホテル(長野県・長野市)―高原の爽快さをデザインした都市型ホテルが県都の玄関口に布陣!」『月刊ホテル旅館』1985年12月号、pp. 31-33; pp. 42-46.

60 『ホテルレビュー』1988年5月号、p. 30.

61 「『鹿部ロイヤルホテル』4月23日オープン＝大和ハウス工業」『投資経済』1986年3月、pp. 112-113. さらに大和ハウス工業は、1980代後半から90年代に、次々と「ロイヤル」と付くホテルを開業していった。1987年に宮城蔵王ロイヤルホテル、裏磐梯ロイヤルホテル、唐津ロイヤルホテル、長浜ロイヤルホテル、1988年に八幡平ロイヤルホテル、南淡路ロイヤルホテル、沖縄残波岬ロイヤルホテル、土佐ロイヤルホテル、浜名湖ロイヤルホテル、大山口ロイヤルホテル、1989年にりんどう湖ロイヤルホテル、1990年に南房総富浦ロイヤルホテル、別府湾ロイヤルホテル、1994年に橿原ロイヤルホテル、玄海ロイヤルホテル、宮津ロイヤルホテル、北九州八幡ロイヤルホテル、紀州南部ロイヤルホテル、1996年に信州松代ロイヤルホテル、西脇ロイヤルホテル、1997年に大泉高原 八ヶ岳ロイヤルホテル、1998年に砺波ロイヤルホテル、串本ロイヤルホテルといった具合である。大和リゾート株式会社「沿革」<https://www.daiwaresort.jp/chain/gaiyo/history/index.html> (2022年6月15日閲覧)

62 河村英和「1960-70年代の日本のホテル建築について」『戦後昭和の建築―その価値づけをめぐる―(2021年度日本建築学会大会(東海)建築歴史・意匠部門研究協議会資料)』、日本建築学会、2021年、p. 98.

屋号はホテルの顧客の出身国に因んで名付けられたもので、英国に関するものが圧倒的に多いのは、英国貴族がこぞってイタリアへ赴いていたグランド・ツアーの賜物である<sup>64</sup>。英国人をメインの顧客として誕生したホテルの屋号には、国名だけでなく英国の主要な町名や地区名を使用したものも少なくない<sup>65</sup>。首都ロンドンは、伊語なら「ロンドラ Londra」、高級感を出す必要のある仏語名のホテルなら「ロンドル Londres」と称され、英王室の城がある町「ウィンザー Windsor」や、英王室の墓所のあるウェストミンスター大聖堂がある地区「ウェストミンスター Westminster」、ロンドンの劇場街のある地区「ウェスト・エンド West End」、港町「ブリストル Bristol<sup>66</sup>」も、しばしばホテルの屋号になった。イタリアでは、他にもフランス、ドイツ（プロイセンやバイエルンなど）、ロシアなどの国名とそれらの首都名や有名な町の名前を使ったホテル名が、19世紀のあいだ続々と誕生した<sup>67</sup>。例えば、ローマの名建築家ジュゼッペ・ヴァラディエ Giuseppe Valadier（1762 -1839）が設計した18世紀末の建物に入居したローマの最高級ホテル「オテル・ド・ルッシ（ホテル・ロシア）Hôtel de Russie」は、一時期休業して建物も解体されたが近年復活し、再びローマで最も格式あるホテルの座に君臨しており<sup>68</sup>、19世紀のナポリで営業していた「オテル・ド・ルッシ」はすでに戦前から廃業して一般住宅となり、建物のみ今も残っている<sup>69</sup>。

63 19世紀前半は、高級ホテルの代名詞とも考えられていた屋号のひとつだった。Carena, Giacinto, *Osservazione intorno ai vocabularj della lingua italiana*, Giuseppe Pomba, Torino, 1831, p. 152. おそらくこの「4か国」は、イギリス、フランス、スペイン、イタリアのことを指していたと考えられる。というのも、ヴェネツィアの劇作家カルロ・ゴルドーニの代表作『抜け目ない未亡人 *La vedova Scaltra*』（1748年）を原作に、オペラ化したニコロ・ピッチニニ作曲オペラのメインタイトルが『四ヶ国もしくは抜け目ない未亡人 *Le quattro nazioni o La vedova scaltra*』（1773年）であり、主人公の未亡人に求愛する4名の男性の国籍がイギリス、フランス、スペイン、イタリアであるからだ。

64 ベルエポック期、英国人は結核の転地療養で、夏はスイスの山間へ、冬はリヴィエラ沿岸のホテルに滞在することがよく行われていたので、これらに地域にも英国に因んだ屋号のホテルが数多く誕生した。Kawamura, Ewa, *Il soggiorno dei tisici inglesi negli alberghi italiani e svizzeri tra Ottocento e Novecento*, Storia del turismo Annale 2005, Franco Angeli, Milano, 2007, pp. 9-34; pp. 129-134.

65 ユースタスが作成したイタリアのホテルリスト内で町の名前を使用したホテル屋号には、フィレンツェの「ニューヨーク Nuova York」、リヴォルノの「ロンドンの町 The City of London」、ヴェネツィアの「大パリ Gran Parigi」がある。Eustace, John Chetwode, *A Classical Tour through Italy*, An. MDCCCII, vol. IV, 1818, Leghorn, pp. 507-509.

66 ホテル屋号「ブリストル」は、イタリア旅行好きだった第4代ブリストル伯爵 Frederick Augustus Hervey, 4th Earl of Bristol（1730–1803）の人名に由来するとする説もある。https://www.oetkercollection.com/hotels/le-bristol-paris/the-hotel/history/（2022年6月15日閲覧）

67 Kawamura, Ewa, *Segni dell'identità nazionale dei diversi paesi nelle strutture ricettive in Italia. Il caso degli alberghi fondati dagli svizzeri fra Ottocento e Novecento*, La città multietnica nel mondo mediterraneo. Porti, cantieri, minoranze, Bruno Mondadori, Torino-Milano, 2019, pp. 256-257.

68 1940年に解体され、再建後はイタリア放送局の事務で使用されていたが、2000年に再びホテルとなった。Kawamura, Ewa, *Repertorio e tendenza negli articoli della rivista del Touring Club Italiano «L'Albergo in Italia», 1925-1943*, Storia dell'Urbanistica. Speciale n. 1/2021, Edizioni Caracol, Palermo, 2021, p. 296.

また19世紀には、「インペリアル Imperial」や「ド・ランペルール de l'Empereur」のような、ロシアやオーストリア、プロイセンなどの「帝国」に敬意を払って命名された屋号も誕生した。一方、皇室のある日本では、横浜に「インペリアル・ホテル」(1866年)、東京に「帝国ホテル」(1890年)ができた<sup>70</sup>。

ヨーロッパ各国では19世紀初期のロマン主義時代より、ナポレオン戦争に反旗を翻すかのように、愛国的感情が高揚しはじめたためか、「ナシオナル (ナショナル) National」という屋号も登場してくる。イタリアではとくに国家統一後から、自国名「イタリア (高級ホテルなら仏語名で de l'Italie)」と命名するホテルも増えてくるが、それよりも先に普及してきたのは、先に述べたよう、グランド・ツアーの英国人やその他外国人顧客の出身国に媚びた国名を冠した屋号である。例外的なのは、スイスの国名・町名に因んだホテルの屋号で、それがスイス国外にある場合はスイス人顧客に媚びたものではなく、スイス人経営のホテルであることを誇りとして命名された。つまり、19世紀から20世紀初頭までの、スイス国外のホテル業界でスイス人が広く活躍していたことに起因している<sup>71</sup>。

イタリアでは自国の町の名前を使うホテルも多くでてきたが<sup>72</sup>、自国の町の名前でも、ホテルが所在する町の名ではない他の町の名前を使うことがよく行われた。たとえば19世紀前半のナポリで人気のあったホテルのひとつは「オテル・ド・ローム (ホテル・ローマ) Hôtel de Rome」であった<sup>73</sup>。ナポリにはご当地名「ナポリ」を屋号に含ませたホテルも幾つかできたが、中堅ホテルに多かった<sup>74</sup>。19世紀後半以降は、鉄道開通を機に形成されてゆく駅周辺のホテル街で、鉄道で行くことが可能であろう主要な町々の名をホテルの屋号にすることが好まれた。港町の港付近のエリアでは、船でアクセスできそうな海外の町の名前が、ホテルの屋号に選ばれることも珍しくなかった。

日本の場合、イタリアのホテルの命名パターンと同じように、外国人顧客や経営者の国籍に合わせて、国名や町名を使った屋号のホテルが次々と開業したのは横浜の外国人居留地である。1862年に「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル Royal British Hotel」、1863年に「アングロ・サクソン・ホテル Anglo-Saxon Hotel」、1864年に「オテル・ド・ルロップ Hôtel de l'Europe」、1865年に「ブリティッシュ・ホテル British Hotel」と「オテル・ド・パリ Hôtel de Paris」、1866年

---

69 Kawamura, Ewa, *Storia degli alberghi napoletani. Dal Grand Tour alla belle époque, la ospitalità della Napoli "gentile"*, CLEAN Edizioni, Napoli, 2017, pp. 68-70.

70 澤、前掲書、p. 289.

71 Kawamura, Ewa, *Alberghi e albergatori svizzeri in Italia tra Ottocento e Novecento*, Storia del turismo Annale 2003, Franco Angeli, Milano, 2004, pp. 11-41.

72 町の名前が付いた屋号のホテルは、超一流ホテルではあまりみられず、中堅ホテルに多いので、仏語名にする場合と、伊語名のままにする場合の両方がある。

73 Kawamura, *op. cit.*, 2004, pp. 49-55.

74 *Idem*, p. 86, p. 109, p. 137, p. 144, pp. 219-222.



に「ベルリン・ホテル Berlin Hotel」、1868年に「オテル・ド・フランス Hôtel de France」が横浜にできた<sup>75</sup>。

英国に因む屋号をもつホテルは、世界中どの町でもたいてい最高級ホテルであったが、自国名をホテル名にする場合は、さほど敷居の高いホテルではないこともあった。日本で自国名を使ったホテルの初期の事例は横浜で、「オテル・デュ・ジャポン Hôtel du Japon」（1863年）と「ジャパン・ホテル Japan Hotel」（1870年）があるが、いずれも最高級ホテルではなかったのか短命だった<sup>76</sup>。その一方、長崎にあった「ジャパンホテル<sup>77</sup>」（1889年、旧セントラル・ホテル）は木造洋館建築で、長崎で最も格式あるホテルであった<sup>78</sup>。戦後、東京の永田町にできた巨大な「ホテルニュージャパン Hotel New Japan」（1960年、1982年焼失）も一流ホテル路線であった。また、日本のゼネコン大成建設がジャカルタに建設した「ホテルインドネシア Hotel Indonesia」（1962年）は、国家を代表するホテルとして誕生し、今も最高級ホテルである<sup>79</sup>。

## 2-4. 「国際」を含むホテル名

英国貴族のグランド・ツアーはナポレオン戦争とともに終息するが、産業革命を通じて19世紀はブルジョワが台頭し、ヨーロッパ旅行を行う人々の国籍も多様化したため、19世紀に「無国籍系・多国籍系」の屋号が派生した。「アンテルナショナル（インターナショナル）International」、「コンティネンタル Continental<sup>80</sup>」、「アンバサダー Ambassadeur」、「コスモポリタン Cosmopolitan」、「グローブ（地球）Globe」、「ド・ルニヴェール（世界）de l'Univer」のように、特定の国籍を指定せずに国際性・多国籍性を表すタイプの屋号であるが、これらは日本ではあまり普及しなかった。ただし、日本では「国際」と付くホテルの屋号が戦後から珍しくなかった。とはいえ、1930年代に外貨獲得のための国策として、外国人客を迎えるのにふさわしい高級ホテルの建設に対し低利融通を行う制度が始まり、この制度を利用して建設されたホテルは「国際観光ホテル」という名のジャンルにくられたものの<sup>81</sup>、この低利融通を受けて建設されたホテルの屋号に「国際」

75 澤、前掲書、pp. 288-301.

76 澤、前掲書、pp. 102-104.

77 『長崎縣紀要』第二回関西九州府県聯合水産共進会長崎県協賛会、1907年、p. 232; 『観光地と洋式ホテル』鐵道省、1934年、p. 62. ただし当時の絵葉書には仏語名で「オテル・デュ・ジャポン Hotel du Japon」と書かれている。

78 このホテルは、1937年に火事で焼失した。ブライアン・バークガフニ「絵葉書がささやく旧長崎居留地の歴史 Vol. 7」『長崎南ロータリークラブへようこそ』[http://www.minamiro.jp/old\\_settlement/vol7.html](http://www.minamiro.jp/old_settlement/vol7.html) (2022年4月4日閲覧)

79 A.R. ソーレンセン・大成建設設計部「計画案：インドネシアホテル」『新建築』1960年5月号、pp. 44-46; A・ソーレンセン・大成建設設計部「ホテルインドネシア」『新建築』1963年1月号、p. 93.

80 「インターコンティネンタル Intercontinental」というホテル名を普及させたのは、戦後のアメリカである。

が入ったものが広く普及することはなく、「ホテル所在地の地名+ホテル<sup>82)</sup>」あるいは「ホテル所在地の地名+観光ホテル<sup>83)</sup>」という名前ばかりだった。

むしろ「地名+国際ホテル」と命名される屋号が増えるのは、「国際観光ホテル整備法」が制定された1949年ごろからで、次のような名のホテルが続々と建設されていった。青森国際ホテル(1948年<sup>84)</sup>)、神戸国際ホテル(1956年<sup>85)</sup>)、京都国際ホテル(1961年<sup>86)</sup>)、倉敷国際ホテル(1963年<sup>87)</sup>)、名古屋国際ホテル(1964年<sup>88)</sup>)、鳥羽国際ホテル(1964年<sup>89)</sup>)、高松国際ホテル(1964年<sup>90)</sup>)、長崎国際ホテル日昇館(1966年<sup>91)</sup>)、天草国際ホテル(1966年<sup>92)</sup>)、倉敷の水島国際ホテル(1966年<sup>93)</sup>)、小豆島国際ホテル(1966年<sup>94)</sup>)、大阪国際ホテル(1966年<sup>95)</sup>)、奈良国際ホテル(1967年<sup>96)</sup>)、広島国際ホテル(1967年<sup>97)</sup>)、桜島国際ホテル(1969年<sup>98)</sup>)、秋保国際ホテル(1970年<sup>99)</sup>)、玉造国際ホテル(1970年<sup>100)</sup>)、鬼怒川温泉のきぬ川国際ホテル(1971年<sup>101)</sup>)、雲仙温泉の寿国際ホテ

---

81 砂本文彦「1930年代に政府系資金により建設された「国際観光」ホテルについて：国際観光政策に伴う都市施設整備に関する研究(2)」『日本建築学会学術講演梗概集(関東)』1997年9月、pp. 19-20；砂本文彦「1930年代の国際観光政策により建設された「国際観光ホテル」について」『日本建築学会計画系論文集 第510号』1998年8月、pp. 235-242.

82 蒲郡ホテル、上高地ホテル、琵琶湖ホテル、川奈ホテルである。

83 雲仙観光ホテル、名古屋観光ホテル、赤倉観光ホテル、阿蘇観光ホテル、日光観光ホテルである。

84 朝日新聞社編、前掲書、p. 135.

85 ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑1972年版』オータパブリケーションズ、1971年、p. 302.

86 吉村設計事務所「京都国際ホテル」『新建築』1962年2月号、pp. 73-88；ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑1973年版』オータパブリケーションズ、1972年、p. 325.

87 倉敷建築研究所「倉敷国際ホテル」『新建築』1964年2月号、pp. 99-112.

88 ホテルレストラン誌編、前掲書、1972年、p. 301.

89 「鳥羽国際ホテル・三重」『大成クォーターリー(13)』1964年、p. 7；「鳥羽国際ホテル新館」『SD』1971年10月号、p. 147；朝日新聞社編、前掲書、p. 196.

90 「(72)高松国際ホテル 竹中工務店」『SD』1965年9月号、p. 145；ホテルレストラン誌編、前掲書、1971年、p. 337.

91 1969年に新築移転。朝日新聞社編、前掲書、p. 250.

92 天草五橋の開通とともに開業した。朝日新聞社編、前掲書、p. 255.

93 「水島国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1969年2月号、pp. 87-91；ホテルレストラン誌編、前掲書、1971年、p. 318.

94 ホテルレストラン誌編、前掲書、p. 339；「小豆島国際ホテル〈小豆島〉」『月刊ホテル旅館』1972年8月号、pp. 40-42.

95 1951年創業の国際見本市会館ホテルに遡る、1970年に増築、「大阪コクサイホテル」に改名された。朝日新聞社編、前掲書、p. 215.

96 和光建築設計事務所「奈良国際ホテル」『近代建築』1967年5月号、pp. 91-94；「古都の近代化めざすー奈良国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1967年10月号、pp. 79-83.

97 「和・洋食堂に力をいれる繁華街のビジネスホテルー広島市 広島国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1967年4月号、pp. 14-20；編集部「企業をになう人々ー広島国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1968年9月号、pp. 128-134；ホテルレストラン誌編、前掲書、p. 325.

98 1953年創業の旅館「桜岳園」を、1969年に改築改名。朝日新聞社編、前掲書、p. 262.

99 「秋保国際ホテル〈秋保温泉〉」『月刊ホテル旅館』1970年3月号 pp. 88-91.

100 「ビルニュース 丹後中央信用金庫本店・玉造国際ホテル」『近代建築』1970年10月号、pp. 126-129；「玉造国際ホテル〈玉造温泉〉」『月刊ホテル旅館』1971年2月号、pp. 20-24.



図5 屋号に「国際」を含む日本のホテルの絵葉書・パンフレット・荷札のロゴ部分のコラージュ

ル（1970年<sup>102</sup>）、霧島国際ホテル（1971年<sup>103</sup>）、札幌国際ホテル（1971年<sup>104</sup>）、北陸国際ホテル（1971年<sup>105</sup>）、米子国際ホテル（1971年<sup>106</sup>）、足摺国際ホテル（1971年<sup>107</sup>）、函館国際ホテル（1972年<sup>108</sup>）、坂出国際ホテル（1972年<sup>109</sup>）、岡山国際ホテル（1973年<sup>110</sup>）、宇和島国際ホテル（1974年<sup>111</sup>）、津山国際ホテル（1974年<sup>112</sup>）、新居浜国際ホテル（1974年<sup>113</sup>）、立山国際ホテル（1975

- 101 斎藤武「きぬ川国際ホテル〈鬼怒川温泉〉」『月刊ホテル旅館』1971年10月号、pp. 31-33.
- 102 雲仙が国立公園第一号となった1934年に開業した「寿旅館」に遡る。朝日新聞社編、前掲書、p. 251；日本観光設計事務所「寿国際ホテル」『近代建築』1970年1月号、pp. 105-108.
- 103 荒井信夫「霧島国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1971年12月号、pp. 25-29.
- 104 ホテルレストラン誌編、前掲書、p. 62；斎藤武「札幌国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1971年9月号、pp. 28-31；「847- 札幌国際ホテル」『SD』1973年11月号、pp. 123-123.
- 105 1941年創業の旅館に遡る。
- 106 ホテルレストラン誌編、前掲書、p. 320.
- 107 るるぶトラベル「足摺国際ホテル（Ashizuri Kokusai Hotel）」<https://www.rurubu.travel/hotel/japan/tosashimizu/ashizuri-kokusai-hotel?cid=1839184>（2022年4月8日閲覧）
- 108 東海興業 K.K. 設計部「函館国際ホテル」『建築界』1972年6月号、pp. 37-41；pp. 45-49；「函館国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1972年8月号、pp. 28-31；朝日新聞社編、前掲書、p. 133.
- 109 1957年創業の大阪屋旅館に遡る。朝日新聞社編、前掲書、p. 228.
- 110 早川哲「岡山国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1973年7月号、pp. 20-24；「岡山国際ホテル—ハイクラスに照準合わせた施設構成」『月刊ホテル旅館』1974年7月号、pp. 64-66.
- 111 ANA「宇和島国際ホテル」<https://www.ana.co.jp/domtour/booking/csm/search/DSEP0080/init?coptCd=10198&faciCd=01&extAccFlg=1>（2022年4月8日閲覧）
- 112 林浩二「津山国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1974年9月号、pp. 31-34.
- 113 『ホテルレビュー』1976年11月号、p. 24.

年<sup>114</sup>)、小樽国際ホテル(1977年<sup>115</sup>)、今治国際ホテル(1978年<sup>116</sup>)、国際ホテル松山(1979年<sup>117</sup>)、恵那峡国際ホテル(1980年<sup>118</sup>)、金沢国際ホテル(1981年<sup>119</sup>)である。いずれも新築の中堅～高級ホテルで(図5)、1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万博、1972年の札幌冬季オリンピックの前後に、モダニズム建築様式で、数多く建設されていたが、現在ではそのほとんどが廃業しているか建て替えられている。

(つづく)

## 【謝辞】

本研究は、2021年度跡見学園女子大学特別研究助成費を受けて実施された研究成果の一部である。ここに記して心より謝意を表します。

## 参考文献

### (和文)

- 朝日新聞社編『日本の宿—Where to lay your head in Japan』朝日新聞社、1977年
- 稲葉なおと『夢のホテルのつくりかた』エクスナレッジ、2021年
- 大熊喜邦「築地ホテル館考」『建築二十講』鈴木書店、1923年、pp. 305-336
- 岡田哲郎編『建築デザインシリーズ10 旅館とホテル』井上書院、1956年
- 河村英和「19世紀から20世紀初頭におけるヴェネツィアのホテル建築の変遷について—ヴェネト・ビザンチン様式の歴史的パラッツォ転用からグランドホテル様式建設まで」『日本建築学会計画系論文集 73 (629)』、2008年、pp. 1637-1642
- 河村英和「昭和30年代のホテル建築の特徴について」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第33号、2022年、pp. 25-57
- 河村英和「新築完成予想図が掲載される昭和30～40年代のホテルパンフレットについて」『跡見学園女子大学 観光コミュニティ研究』第1号、2022年、pp. 51-77
- 河村英和「1960-70年代の日本のホテル建築について」『戦後昭和の建築—その価値づけをめぐって(2021年度日本建築学会大会(東海)建築歴史・意匠部門研究協議会資料)』、日本建築学会、2021年、pp. 93-98
- 『観光地と洋式ホテル』鐵道省、1934年

---

114 立山国際ホテル「会社概要」<https://www.tatekoku.com/company.html> (2022年4月8日閲覧)；

「立山国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1976年3月号、pp. 12-13；pp. 15-19.

115 斎藤武「小樽国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1977年3月号、p. 11；pp. 20-24.

116 『ホテルレビュー』1979年5月号、p. 20.

117 『ホテルレビュー』1985年5月号、p. 21.

118 「開業20年を節目に一層の躍進 恵那峡国際ホテル」『中部経済界』1999年2月号、p. 55.

119 『ホテルレビュー』1983年5月号、p. 19.

木村吾郎『日本のホテル産業史』近代文芸社、1994年

木村吾郎『日本のホテル産業史』明石書店、2006年

澤護『横浜外国人居留地ホテル史（敬愛大学学術叢書3）』白桃書房、2001年

砂本文彦『近代日本の国際リゾート：一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社、2008年

砂本文彦「1930年代に政府系資金により建設された「国際観光」ホテルについて：国際観光政策に伴う

都市施設整備に関する研究（2）」『日本建築学会学術講演梗概集（関東）』1997年9月、pp. 19-20

砂本文彦「1930年代の国際観光政策により建設された「国際観光ホテル」について」『日本建築学会計画

系論文集 第510号』1998年8月、pp. 235-242

全国同盟旅館協会編『全国旅館名簿』神田屋商店出版部、1926年

富田昭次『ホテルの社会史』青弓社、2006年

『長崎縣紀要』第二回関西九州府県聯合水産共進会長崎県協賛会、1907年

初田亨「外国人旅館（築地ホテル館）の建築について」『日本建築学会論文報告集（通号331）』1983年9

月、pp. 130-138

ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑1972年版』オータパブリケーションズ、1971年

ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑1973年版』オータパブリケーションズ、1972年

旅館研究会編『全国旅館名簿 第3版』旅館研究会、1941年

#### (欧文)

Carena, Giacinto, *Osservazione intorno ai vocabularj della lingua italiana*, Giuseppe Pomba, Torino, 1831

Denby, Elaine, *Grand Hotels*, Reaktion Books, London, 1998

Durand, Jean-Nicolas-Louis, *Précis des leçons d'architecture*, vol. 2, Chez l'Auteur et Bernard, Paris, 1823

*L'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres*, Tome huitieme (H=IT), Samuel Faulche, Neufchastel, 1765

Eustace, John Chetwode, *A Classical Tour through Italy, An. MDCCCII*, vol. IV, Glaucus Masi, Leghorn, 1818

Forni, Maria Enrica Marica, *L'Albergo Reale di Mantova*, in *Accademia Nazionale Virgiliana di scienze lettere e arti, Atti e memorie, Nuova serie*, vol. LXXI, Accademia nazionale virgiliana, Mantova, 2003

Kawamura, Ewa, *Alberghi e albergatori svizzeri in Italia tra Ottocento e Novecento*, Storia del turismo Annale 2003, Franco Angeli, Milano, 2004, pp. 11-41

Kawamura, Ewa, *Architettura alberghiera in Italia: dalla trasformazione degli edifici storici alla costruzione dei grand hotel*, Architettura per l'ospitalità in Italia tra Ottocento e Novecento,



Gangemi Editore, Roma, 2020, pp. 17-30

Kawamura, Ewa, *Il soggiorno dei tiscici inglesi negli alberghi italiani e svizzeri tra Ottocento e Novecento*, Storia del turismo Annale 2005, Franco Angeli, Milano, 2007, pp. 9-34, pp. 129-134

Kawamura, Ewa, *Repertorio e tendenza negli articoli della rivista del Touring Club Italiano «L'Albergo in Italia», 1925-1943*, Storia dell'Urbanistica. Speciale n. 1/2021, Edizioni Caracol, Palermo, 2021, pp. 274-298

Kawamura, Ewa, *Segni dell'identità nazionale dei diversi paesi nelle strutture ricettive in Italia. Il caso degli alberghi fondati dagli svizzeri fra Ottocento e Novecento*, La città multietnica nel mondo mediterraneo. Porti, cantieri, minoranze, Bruno Mondadori, Torino-Milano, 2019, pp. 255-267

Kawamura, Ewa, *Storia degli alberghi napoletani. Dal Grand Tour alla Belle Époque nell'ospitalità della Napoli «gentile»*, CLEAN Edizioni, Napoli, 2017

Ledoux, Claude-Nicolas, *L'Architecture considérée sous le rapport de l'art, des mœurs et de la législation*, chez l'Auteur, Paris, 1804

Pevsner, Nikolaus, *A History of Building Types*, Princeton University Press, Princeton, 1976

Schmitt, Michael, *Palast-Hotels. Architektur und Ausdruck eines Bautyps 1870-1920*, Gebr. Mann Verlag, Berlin, 1982

Valdrighi, Luigi Francesco, *Appendici e note alla 2. edizione del dizionario storico - etimologico delle contrade e spazi pubblici di Modena*, Società tipografica, Modena, 1883

Simoncini (a cura di), Giorgio, *L'edilizia pubblica nell'età dell'Illuminismo*, vol. 2, Olschki, Firenze, 2000

Valdrighi, Luigi Francesco, *Dizionario storico-etimologico delle contrade e spazi pubblici de Modena*, seconda edizione, Tipi di Andrea Rossi, Modena, 1880

Watkin, David, *The grand hotel style*, in *Grand Hotel*, London-Melborne, 1984, pp. 13-25

#### 〈雑誌記事〉（時系列順）

A.R. ソーレンセン・大成建設設計部「計画案：インドネシアホテル」『新建築』1960年5月号、pp. 44-46

A・ソーレンセン・大成建設設計部「ホテルインドネシア」『新建築』1963年1月号、p. 93

吉村設計事務所「京都国際ホテル」『新建築』1962年2月号、pp. 73-88

倉敷建築研究所「倉敷国際ホテル」『新建築』1964年2月号、pp. 99-112

「鳥羽国際ホテル・三重」『大成クォーターリー（13）』1964年、p. 7

「(72) 高松国際ホテル 竹中工務店」『SD』1965年9月号、p. 145

「和・洋食堂に力を入れる繁華街のビジネスホテル—広島市 広島国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1967年4月号、pp. 14-20

- 和光建築設計事務所「奈良国際ホテル」『近代建築』1967年5月号、pp. 91-94
- 「古都の近代化めざす—奈良国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1967年10月号、pp. 79-83
- 編集部「企業をになう人々—広島国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1968年9月号、pp. 128-134
- 「水島国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1969年2月号、pp. 87-91
- 日本観光設計事務所「寿国際ホテル」『近代建築』1970年1月号、pp. 105-108
- 「秋保国際ホテル〈秋保温泉〉」『月刊ホテル旅館』1970年3月号 pp. 88-91
- 「ビルニュース 丹後中央信用金庫本店・玉造国際ホテル」『近代建築』1970年10月号、pp. 126-129
- 「玉造国際ホテル〈玉造温泉〉」『月刊ホテル旅館』1971年2月号、pp. 20-24
- 「館山寺ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1971年2月号、pp. 11-15
- 斎藤武「札幌国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1971年9月号、pp. 28-31
- 斎藤武「きぬ川国際ホテル〈鬼怒川温泉〉」『月刊ホテル旅館』1971年10月号、pp. 31-33
- 「鳥羽国際ホテル新館」『SD』1971年10月号、p. 147
- 荒井信夫「霧島国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1971年12月号、pp. 25-29
- 斎藤武「鬼怒川ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1972年4月号、pp. 38-40
- 東海興業 K.K. 設計部「函館国際ホテル」『建築界』1972年6月号、pp. 37-41；pp. 45-49
- 「函館国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1972年8月号、pp. 28-31
- 「小豆島国際ホテル〈小豆島〉」『月刊ホテル旅館』1972年8月号、pp. 40-42
- 「信州ロイヤルホテル〈上山田〉」『月刊ホテル旅館』1972年10月号、pp. 20-23
- 森一級建築設計事務所「相模湖ローヤルホテル」『近代建築』1973年2月号、pp. 102-105
- 関建築設計事務所「三朝ロイヤルホテル」『近代建築』1973年7月号、pp. 106-108
- 早川哲「岡山国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1973年7月号、pp. 20-24
- 「847- 札幌国際ホテル」『SD』1973年11月号？110号、pp. 123-123
- 早川哲「岡山ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1973年12月号、pp. 37-40
- (株)極東設計事務所「鳥羽ロイヤルホテル」『近代建築』1974年5月号、pp. 114-117
- 「金沢ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1974年6月号、pp. 35-37
- 「岡山国際ホテル—ハイクラスに照準合わせた施設構成」『月刊ホテル旅館』1974年7月号、pp. 64-66
- 林浩二「津山国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1974年9月号、pp. 31-34
- 斎藤武「群馬ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館』1975年11月号、pp. 33-37
- 「立山国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1976年3月号、pp. 12-13；pp. 15-19
- 坂倉建築研究所東京事務所「群馬ロイヤルホテル」『新建築』1976年4月号、pp. 179-192
- 『ホテルレビュー』1976年11月号
- 「ホテルロイヤル盛岡」『月刊ホテル旅館』1976年12月号、pp. 15-19
- 斎藤武「小樽国際ホテル」『月刊ホテル旅館』1977年3月号、p. 11；pp. 20-24
- 福永文雄「随筆 能登ロイヤルホテル」『温泉』1978年11月号、p. 6
- 『ホテルレビュー』1979年5月号

「ロイヤル」や「国際」が付くホテル名の日欧比較

『ホテルレビュー』1982年5月号

『ホテルレビュー』1983年5月号

『ホテルレビュー』1985年5月号

「霧島ロイヤルホテルがオープン」『財界九州』1985年4月号、pp. 130-131

高島不二男「長野ロイヤルホテル（長野県・長野市）—高原の爽快さをデザインした都市型ホテルが県都の玄関口に布陣！」『月刊ホテル旅館』1985年12月号、pp. 31-33；pp. 42-46

「『鹿部ロイヤルホテル』4月23日オープン＝大和ハウス工業」『投資経済』1986年3月、pp. 112-113

『ホテルレビュー』1988年5月号

「開業20年を節目に一層の躍進 恵那峡国際ホテル」『中部経済界』1999年2月号、p. 55